有明高専だより

第51号
有明工業高等専門学校
〒836・大牟田市東萩尾町150
TEL 0944 (53) 1011
印　刷・㈱延命プリント

昭和58年 新年講話（抄）

校長　吉村虎蔵

年末年始、大きな交通事故もなく、交通事故死ゼロの記録が、二年前のあの非常事態から数えて、七四〇日を越えたことを心から慶び、事故絶滅の誓を新にしたいものであります。新年講話として今日は三つの話題を選びました。

これからの科学技術

創造性豊かな科学技術の開発なくしては、今後、国際的に技術で生きる道はない、とはかねてから唱えられているところでありますが、年末の科学技術白書の中で、これからの先導的基礎的科学技術のテーマとして、ライフサイエンス（生命科学）、情報電子、材料科学技術、海洋開発などの他、極限科学技術、宇宙開発、核融合が挙げられています。

まず、生命科学の中で、工学の分野ではバイオテクノロジー（生物工学）が挙げられます。微生物、酵素、触媒などの反応を利用して、医薬品、食品、エネルギー等の技術を開発するものです。

近く本校でも、これらの基礎分野の授業が始められることになっています。

次に、テクノポリス（高度技術集積都市）として、現在、全国で十六の地域が指定候補としてあげられ、これらのテクノポリス構想の中では、情報・電子技術の開発、応用、素子部品機器の製作などが、主として計画されていることは、諸君のよく知るところであります。

また、技術の進歩には、新しい材料の開発が大切で、電子材料、通信材料、構造材料等の多くの分野がありますが、ファインセラミックスの開発と応用はその一例であります。板ガラスのトップメーカーが、一八一五年に英国で発明されたまま日の目を見なかったスターリングエンジンを、ファインセラミックスによって、その実用化に成功したことは新年の明るいニュースでありました。このエンジンには、バイオマス（生物資源）を含めて太陽熱、地熱なども熱源として利用可能ということでありますから、実用化段階では幅広い分野での活用が期待されます。

以上の三テーマ及び海洋開発技術なども、諸君の属する一学科のみのテーマではなく、本校のどの学科にも関係するテーマであります。諸君はこのような新しい技術の社会で働き、若い柔軟な頭脳でもっともっと新しい技術を開発する指命をもっています。そのためには、現在の授業の中で、とくに工学基礎、専門基礎の修得と工学的な物事の考え方の訓練が、その活力となることを、ここで訴えておきたいと思います。

高専への外国人留学生

各国が国際協力として受入れる国費留学生数とその国の高等教育をうける学生数との比率は、昭和五十六年現在、英、仏、西独、米国で、それぞれ一二、九・五、六・一、一・五パーセントであります。米の留学生数は約二十三万人で絶対数では多いのです。これらに比べて日本は〇・三四パーセントで約七千人です。経済大国日本の国際協力がこれでよいのかという批判がここにあります。一方高専制度は二十周年を迎え、卒業生は広く社会の評価を得て参りました。

そこで、本年四月から国立高専五十四校の中で、六校が十一名の留学生（インドネシア、中国、マレーシヤ）を受入れることになっています。本校も二年先位を目途に、受入れる方向で問題点を検討中であります。諸君の中から、チューターを数名選び、留学生の相談指導員として協力を願わねばなりません。また一般学生の勉学態度や生活態度は、留学生に大きく影響しますから、諸君一人一人が国際協力の気持をもたねば、先生方だけの力では、留学生受入れは成功しないと考えます。二年先に備えて、日常の生活の中で、自分本位・自己中心の態度を改め、学習に、クラブ活動に、寮生活に、新しい心構えで励むことを、切にお願いしたい。

周恩来の詩

ここで、中国の周恩来が十九才の時、留学のため日本に出発するにあたって詠んだ詩を紹介しましょう。これは九州大学工学部長室注等はすべて、岡村繁九大教授による。）

大江歌罷悼頭東
蓬密群科済世窮
面壁十年図破壁
難酬蹈海亦英雄

大江に歌罷（や）み頭を掉って東し。群科を蓬密（すいみつ）にして世の窮するを済（すく）わん。面壁十年壁を破らんことを図る。蹈海（とうかい）に酬（むく）い難きも亦た英雄。

（訳）

掲子江のほとりで送別の歌声がときれた時、私は、かくてはならじと東のかた日本に出発することになったが、社会科学を深く詳しく研究して、わが中国の困窮を救わねばならない。

今後日本で一心不乱に研究に専念すること十年、旧弊を打破して新しい天地に躍り出たいものだ。

むかし魯仲連が東海に身を投ぜんとした決死の覚悟には及ぶべくもないけれども、それでも今回の私の壮挙は、英雄的な行動であるはずだ。

（注）

蹈海―海に身を投げて死ぬこと。むかし戦国時代の斉の国の魯仲連という人が「奏の支配を受けるよりは東海を蹈んで死んだ方がましだ」といった故事をふまえる。

酬―対応する。

十九才といえば、諸君と同じ位の年頃です。留学にあたっての覚悟の堅さ、意気の盛んな様がよくうかがえると思います。

そこで、将来の技術を荷う諸君の、現在の勉学に対する覚悟もこのようであってほしいと願う一方、留学生として来日する若人も、詩の作者と同じ覚悟で、日本の技術を学び、とくに実践的技術教育を特色とする高専に期待をもって来日するでしょうから、その意気込みに負けない様に、諸君の新しい心構えを、新年にあたり願うものであります。

（五八、一、八）

文化講演「大説と小説」

講師　熊本日日新聞社論説委員会副委員長
第八十五回直木賞受賞作家
光岡　明　氏

期日　昭和五十七年十一月一日

タイトルが「大説と小説」大説とは何かと皆さん思うかも知れません。これは私の造語ではなくて一応世の中にあるものですが、市民権を得ている言葉ではありません。そこで小説に対する大説と今のところは簡単に考えておいて下さい。

私が書いた「機雷」の次に今年別冊「文芸春秋」という雑誌に二回にわたって「千里眼の女」という作品を書きました。「千里眼の女」は実在の女性で、有明海と不知火海を仕切る熊本県の宇土半島の南岸に松合という小さな漁村があり、ここに出た女性で御船千鶴子さんといいます。

皆は千里眼をどう思うか知らないが、例えば茶壺の中に字を書いた紙を入れ、それを外から透視する。皆は「そんなことができるものか」と思うかも知れません。

この人は明治四十三年に千里眼の能力が発見され、翌四十四年、東京大学の総長をされたこともある山川健次郎先生という大変立派な方を筆頭に十四人の博士が、御船さんの千里眼の能力を本気で調べたのです。その実験は東京で三回行われ、一回目は失敗しますが、二回・三回は物の見事に中の文字を読むのです。

一回目御船千鶴子が失敗したのは、別の人が与えた実験物を透視する。それもきちんと読める。しかしそれは山川先生が与えた実験物ではなかったので一回目は失敗したとなっている。二回目は心神通という三字を見事に読み、三回目は道徳天という三字を実際に読むのです。勿論この十四人の先生は茶壺に紙を貼り、押印し、紙撚でくくり、絶対開けられぬようにして御船千鶴子に渡します。彼女はこの茶壺の中に書いてある字を書いて持って出て来る。十四人の先生が縦横何処から見ても蓋を開けたとか、何処かを破り中を覗いたという形跡がない。先生方の眼の前で蓋が開けられ、御船千鶴子が書いた字と中に書いてある字が全く同じことを確認するのです。

二回は当る。それで世間は大騒動になります。私は当時の東京朝日新聞を見たのですが、いろんな人の談話が取ってあります。「これは非常に不思議だ。「どうしてこんなことができるか判らぬ。」当時の理学、医学、文学の博士達が、御船千鶴子は間違いなく中の字を読んだことを確認するわけです。

私もこの小説を書く時は、そんなものが見える筈がない、御船千鶴子は何処かでごまかした、という書き方で一回目を書きました。すると全国から「お前は千里眼とか超能力を信じないのか、可愛想な奴だ、何なら紹介してやる。」という手紙を三十通頂いた。私の近所の人も「阿蘇に〝まっぽしさん〟という方がおられる。そこに貴方をお連れしよう。」とおっしゃった。また、ふすまを隔て行者がいて、こちらの人が右手を挙げると「右」、左手を挙げると「左」と、こちら側の行動を見透す人も熊本市にいるから連れて行く。」と言った人もいます。

実は御船千鶴子は本当に見えたと思うことが私にもあります。皆さん御存知のように、漁村は小さい家が軒を接して建っているし道路も狭い。すれ違う時は身をかわして通らないと駄目な所。雨戸を開ける、向うも開ける。こちらから向いの家まで見通し。子供は縁から縁を跳んで歩く所。昔は一本釣りですから大体一日の漁獲高は決っていて、生活のレベルは殆んど皆同じ。例えばちぬがとれる時は皆ちぬで、旬は決っている。隣近所は見通して歳時が同じ状態で各家に廻ってくる所では人間の考え方は殆んど同じとは言わずとも、等質の考え方になってくる。そんな所では多分人の心が読めたと私は想定したのです。

彼女の父親は御船秀益さんという方で漢方医でした。当時松合の漁村には病院は一軒だけで、病人は全部そこに来る。お爺さんお婆さんが待合室で世間話をします。すると、ただてさえ判り易い所なのに、御船病院は松合の情報が全部集ってくる情報センターみたいなものです。彼女は黙って父の手伝いをしながら話を聞いている。今あそこの何某は何をしている。あそこの何某は何某と近く結婚する、あそこには子供が生まれるとか、いろんなニュースを御船千鶴子は知っていたと思います。お彼岸の時重箱を持って来る。「先生これを召上って下さい。」蓋を取らなくても中味はおはぎと判ります。びくを持ってくる。「先生どうぞ」漁師が持って来る。ちぬの季節であれば蓋も取らずに彼女は中の物を当てることが出来たと思います。御船千鶴子が持っている予知能力とはそういう情報が完全に集まることによってできて行ったのだと思います。

実は写真を見ると、御船千鶴子は非常に美人で、ヒステリー型の女性です。この型の女は予知能力があると心理学的に証明があり、宮城音弥先生の本を読むとその実例が出ています。一寸した予知能力と完全な情報が彼女の周りにあった。そうすると千里眼の能力は次第に喧伝されていくのです。世間にそれが広まり、とうとう東大による合同実験が行われていった。

当然のことながら千里眼の能力とは何かと、科学は実験の条件を厳しくして行きます。実際に鉛の水道管みたいな物の中に字を書いた紙を入れて両端をたたきつぶして彼女に渡したりもします。

御船千鶴子の千里眼の能力を非常に高く買う福来助教授という方が東大におられた。この方は変態心理学、変な意味の変態ではない、常態でない変態心理学の専攻で、彼女の千里眼の能力を最初から信じておられる。信じるという以外にないのです。この方は、簡単に実験の条件を変えると、彼女の精妙な能力は発揮できない、落ちて行く、という立場で、ゆっくり条件を厳しくしようと思われます。

ところが、普通の学者はいきなりやり出すわけです。そして実は御船千鶴子は、東京の場合もそうですけれども、締め切った薄暗い部屋に独りはいって、ふすまを締め切り立ち合い人に姿を見せずに透視をする。少くとも管は開けられていないかも知れないけれども独りでいるという条件は科学的でないからふすまを開けろと立合人は要求する。御船千鶴子はふすまを開けるでも彼女は立合人に背中を向けて膝の上で透視をしている。いろんな先生の立合いのもとで後から見ている限り、確かに彼女の両手が動いた形跡はない。しかし尚かつこっちを向けと。それが科学的条件です。御船千鶴子はこちらを向く。要するに手許を見せろと言うわけで、眼で見ると蓋は開けていないと確認できる。

そんな風に実験の条件が厳しくなってくると、御船千鶴子はだんだん当らなく、読めなくなってくる。勿論これを信じている福来先生の立場からは、条件が急変したため千里眼の精妙な能力が発揮できにくくなっていると解釈されてくるわけです。しかし千里眼を信じていない人達に言わせると、「ホラ、見たことか、何処かごまかしがある。」

ところが、それは明治四十三年夏の話ですが、今度は秋頃から四国の丸亀に、一人の念写の超能力者が出てくる。

この方は裁判所判事夫人で、天照大神を非常に信仰している。心の中に天照という字を思うと、それがはっきりと乾板に浮き出てくる。これは大変なことになります。この世の中は物質とエネルギーから出来ている。しかしそれ以外のものが存在するならば、今迄の物理、化学が根底から覆える大問題になってくる。これも福来先生が何回も実験し、全部ではないが実際にその字が何枚かの乾板にできていく。御船千鶴子以上の超能力者が生まれたと、長尾いく子は又日本中に大評判になって行く。御船千鶴子は当らなくなってくる。

今度は長尾いく子に対しても山川総長は実験します。実は彼女にも一寸した条件があり、長尾家を訪ね実験を申込む人は、写真の乾板を玄関脇の小部屋に三分から五分置かねばならない。それは科学の条件に合わぬからいけないと、山川先生はカバンの中に乾板を入れて、カバンを開けたとたん判るような仕組で実験にはいる。実際にやるのですが、山川先生が乾板をカバンから取り出して、「念写をして下さい。」と言うと、長尾いく子は「先生が私を疑っておられることはよく判りますが、「その箱に乾板を入れるな」とは非常に卑法ではありませんか。」というのです。山川先生は非常に驚き蓋を取ってみると、入れてあった筈の乾板がない。彼女は外から乾板が入れてないことを透視するわけです。それで彼女の名前はまた一段と上るわけです。

御船千鶴子の場合は透視能力はあったと私は思いますが、長尾いく子の念写は明らかに詐欺であったと思います。というのは玄関脇の小部屋に数分でも乾板を置くことは科学的条件として容認できないものです。

長尾いく子が乾板がないことを透視したのは、最初から東大の先生が彼女を駄目にするために乾板を入れなかったと今は想像するのですが、それで彼女は念写（実験）はしないと言切る。東大の先生達は長尾いく子もついに念写ができなくなったと大宣伝をし、この事件はつぶれていきます。御船千鶴子はその翌年全然当らなくなる。そして明治四十四年一月熊本の本荘で自殺をします。

皆さんに言いたいことは、透視ができる状態は皆が判り合っている状態で、これは一種の共同体の世界と呼んでおきたいと思います。そして東大の先生達が科学的実験をしている世界を近代の世界という風に小説の中で描き分けました。近代の世界は合理的な思考で成り立っているもので、そこでは共同体の中で見えていた千里眼の眼も矢張見えなくなってくるのだろうと思います。

今世の中を作っているものは大説の世界で、私は新聞記者として大説の文章を書き、かつ小説も書く。片方には合理的精神、近代精神に則った主張はありますが、そこからは個人の意志とか思いは殆んどこぼれ落ちている。それを小説として拾い上げている。この世の中は殆んど大説で成り立っているからつまらぬなどと言いません。この世の中は大説があって進歩していると先ず覚えておいて下さい。

御船さんの話をしたのは、そんなことはあるものかと頭から決め込むのではなくて、彼女は矢張千里眼の能力を一時発揮した、じゃ調べてみようという共感を情報から受取ってもらいたいからです。今の新聞には人に共感を与える面がない。予想があり、決断があって行動という関与する面、同情があり共感があって涙が出てくるという現実に加担してくる部分がない。

このことを熊本大学におられた中村先生はコミットメントとアタッチメントの欠如と言われました。他人と触れ合うにはいろいろな方法があるでしょうが、皆さんはこの学校時代（青春期）に、他人と付合う、他人に涙することを覚えておかないと、社会に出て肝甚なことを見失うと思います。

どうしてこんなことが起るかと言うと、新聞も予測を書きますが自民党首脳によればとか大蔵省高官筋によればという冠がその上についている。飽くまでも誰かが語ったと新聞は伝えようとする。それ以上世の中はこうなると今書こうとしはい。書けない。新聞はイエスとノーの両方の意見を書き、読者にどちらかを選んで下さいとしか言いません。あっさり言うと新聞は近代が生み出した大衆社会の中で、私自身を書いています。炭二俵を自転車の後に積んで宇土まで運びそれを売って口銭を稼いでいた時代があります。父もそれをやっていた。父は体重が重いから自転車に物を積んでもスーッと坂を下りて行く。後に重い物を積んだ自転車は前輪が何かに触れると、稲妻状にふれて止まらなくなる。そんな時、私は崖に身をすり寄せて自転車を止める。当然怪我をして、運動靴の中に血が溜る位は何時ものことですが、父に助けを求めることは一回もなかった。私はただ体重が増えることばかり思っていた、と小説に書いています。

この父が四十八年に死にました父の死亡記事を書かねばならない。光岡均氏、横に死亡罫を引き、元陸軍中佐、陸軍航空隊桂林地区司令と書いて、かっこを閉じ○月○日熊本市健軍の自宅で老衰のため死去、七十才と書き、父の経歴を全く知らぬことに気がついた。軍国主義の固り、過去の人間と思っていた。十六・七の生意気盛りには父親は不要と思い勝ちで、私は軽蔑さえしていたので、何も話していないことに気がついた。それが最初の小説を書き始めた動機です。そしてすぐその後、熊本県庁援護課に行き、父が軍人恩給を受けるため書いた履歴書を探し出した。

父親についてどれ程知っているか考えてみて下さい。私はその後父と死の問題を「死につく」という題で一五〇枚のエッセイにまとめて「ロマン」という雑誌に発表しました。皆に考えて欲しい。皆は一番身近かな人でも殆んど知らないのではないかということです。

私は大牟田高校に本当の親友がいます。宇土高校時代に出来た親友で、父親のことは知らなくてもお互いに相手のことは経歴、考え方まで全部知っています。こんな友達は社会に出ても屢々お互いに助け合います。私が経済的にではなく精神的に困った時、心からの電話をくれて、意見を言ってくれます。こんな友達が出来にくい世の中ですが、皆さんにも出来たらいいと思います。

大説だけで生きて行こうとすると危い。敗戦で日本は軍国主義から民主主義に変り、その教育を受けた時、軍国主義の権化と思っていた父親がいた。軍国主義と民主主義は相容れぬから、私の場合、父親を切り捨てると、その人との関係は切れてしまう。そして父親が死ぬと物凄く後悔する。考えてみると父は敗戦後に戦争について沈黙を通した。父は敗戦で人生は終った、後は余生だと思っていたに違いない、と父の年になって私は気付いた。親孝行したい時に親は無しと言うけれど、親孝行とは御馳走を食べさせるとか肩をもむことではない、話を聞いてやることだろうと思います。皆さんも同年輩の友人、先生、先輩、後輩と何処かで徹底的に心を開いて話し合っておかぬと間違うのだと思います。

学校の授業は大切で、最後まで勉強すべきです。学科は大説を作る一つの仕組で、これを勉強しないと生きて行けない。又勉強によって大説が発展する、つまり世の中を作っている原理が発展していく。しかしそれだけでは何処かで間違うのではないかと多少の人生の先輩として訴えたいと思う。

では、お前の考える世の中とはどんなものかとなるが、これは私の意見ではないけれど、物を思う

（次ページへ）

（前ページより）

ことと物を考えることを別にすればいい。例えば日本を愛するか否かにおいて、愛する思いでは皆同じ、ただ日本の将来をどう考えるかは様々です。だから日本の将来像の描き方は様々なものがないといけないので自由でなければならぬ。民主主義が自由と平等で成り立つというのは思うことと考えることを一寸分けて考えた方がいいのです。heartで思うし、brainで考えるという風に分けて考えてみようというわけです。

しかし実社会ではこの様に分けて考えることは難しく、考えることばかり。必ず権力が背後にあり権力に近いものが力を持ちやすく権力に遠いものが圧殺されることが起り易い。皆さんも八百人いると八百通りの考え方があるだろう。私の考え方ではないが、今真剣に考えていることで、今は文化の形が持つことにあると思います。つまりお金・車・家を持ちたい、地位・名誉・権力を、所有欲がなくなると世の中は動かない。しかし、皆さんはもう一つ、ある文化を考えて下さい。それは光岡明がそこにいるということでいいということです。持つことを求めると一生涯持つことに向って走り続ける。日本は昭和三・四十年代は経済発展に懸命で、お金や家を持つことに熱中した。しかし日本の国として世の中にあるという時代にはいりつつあると思います。

こんなことを考える一人の先輩がいて皆さんの前で話した。将来「あーそうか、光岡明がいつか話したことはこんなことだった。」と判ってもらえる時があるだろうと思います。

情報そのものも変りつつあります。新聞の読み方にも気をつけて読んで頂きたい。皆さんは人間として見通した形で生きていって欲しいと思います。

（注）

この講演は約一時間十五分に及ぶもので、それを原稿用紙に写すと、一万五千字にもなる。

そこで、それをそのまま再録することは紙面の都合上不可能なので光岡氏のお許しを得て、こちらで適当に要約した。講演自体は親切丁寧で、内容豊かなお話であった。この要約がその本質をそらさず、その精髄を残し得たかは心もとないが、不足の責めは一切当方が負うもので、講演者にはない。講演終了後学生は盛大な拍手で感動と謝意を表わした。

（品川記）

二十周年記念行事準備報告（その2）

「高専だより」五〇号八頁で紹介した通り、記念行事実行委員会が発足し、活動を始めた。

先づ十一月四日第一回実行委員会が開かれ、委員会組織、募金趣意書、卒業生募金方法、教職員募金方法、以後の日程その他について検討し一同了承し、十一月末日を以って各科で整理中の卒業生名簿を一先づ締めて、十二月初旬に趣意書を発送することとなった。

次いで十二月十六日、第二回実行委員会が開かれ、以後の各種業務と日程について話し合った。

計画に従い十二月上旬、各教室の協力を得て、卒業生諸兄に記念事業計画趣意書および寄附払込用振替用紙を発送したところ、十二月末日までに、約一六七名、約八〇万円の寄附が寄せられた。

早速協力を頂いた諸兄には深甚の謝意を表すとともに、尚多忙のため寄附応募が済んでいない方々には、今一度机上を整理して振替用紙を見つけ次第、御協力を贈りたいもの。

ところで、聞くところに依れば配慮不足から多少御迷惑をかけた方もあるとのこと、紙面を借りてお詫び申し上げる。

尚二十周年史について述べるとこの編集委員会は早くから実動に移っていて、委員会も頻繁に開かれ、原稿も出揃いつつあると聞く。いちはやく執筆御協力下さった方方には委員会に代って厚く御礼を申し上げる。

卒業生諸兄には今後尚いろいろ御協力を頂くこともあろうかと思われる。公私とも多忙のこととは思われるが、母校の成人式のため御理解と御協力を切にお願い申し上げて、途中経過報告にかえさせていただく。

創立二十周年記念学生歌歌詞の募集について

このことについては五〇号で極く簡単に案内しておいたが、一月末日〆切り日までに約百六十篇の応募作品が寄せられた。

そこで、この行事の中心的役割を果しておられる穴山先生が、一次銓考として二十三篇を抜き出し、次に花田、瀬戸、丹後、樋口四先生も加わって二次銓考の結果、八篇を選び出され、目下入選作三篇について補作中である。

本号（五十一号）の発行までには時間の余猶がなく、入選作を掲載できないことを御了解願いたい。以上途中経過報告まで。

（主事室）

成人式の新聞記事から

西日本新聞一月十六日朝刊にはそれぞれの地方の成人式の模様が写真を交えて紹介されているが、大牟田市の場合は、「全員で市民憲章唱和」という見出しで当日の式典の情況が記されている「大牟田市の成人式は、同日は午前十時から市民会館で行われた。同市内の新成人者は千八百九十六人（男八百九十五人、女千一人）。会場には千二百人が出席。全員で市民憲章を唱和し、黒田市長の祝辞があった後、「新成人者代表の有明高専五年、木原敬一郎さん（二〇）ー同市勝立ーが『大人の自覚を持って精いっぱい努力していきます』と力強く答えた。」とある。

また、田川市の成人式では「午前十時から田川文化センターに、四百八十一人が出席。（中略）新成人を代表して、同市松原三区、有明高専四年生の桜井雅文さんと同市大藪、九州女子短大二年生の嶋田和美さんが『自覚と責任ある人間に』と決意を述べた。」と田川市の様子を伝えている。

この外にも各地の成人式で若人の代表を務めた人もあると思われるが、成人を迎えた諸君にお祝いをのべるとともに、これを機会に有明高専の最上級生としての自覚と責任ある行動を期待したい。

昭和58年度入試説明会

11月22日午後1時より本校視聴覚室において、中学校の先生・生徒・父兄を招いて、昭和58年度の入試説明会が開催された。

今年は生徒諸君の参加が例年より多く、参加者も年々増加の傾向にあることは喜ばしい事である。

始めに、校長より学校紹介を中心とした挨拶があり、教務主事より入試についての説明、各学科主任より各学科の教育内容、工場見学、就職状況についての説明が行われた。次いで熱心な質疑応答の後説明会を終了し、引き続き希望者による電子計算機室の見学が行われた。

人事異動

◎以下昭和57年11月1日付

▼転　任▲

技　官（建築）　村久木志郎

（九州大学施設部施設課へ）

◎以下昭和57年12月1日付

▼新　任▲

事務官（用度係）　中川日出光

（熊本電波高専学生課より）

▼転　任▲

事務官（用度係）　緒方　哲

（佐賀大学経理部経理課へ）

卒業予定者の進路

昭和58年3月

（昭和58年2月1日現在）

機械工学科

青木　毅　九州電力
荒牧　英幸　安川コントロール
池上　哲二　リョウサン
稲富　雅裕　九州明電エンジニアリング
猪口　和幸　三井鉱山
今村　寧男　日本電装
岩下　展之　三洋電機
上田　清年　三菱電機
牛島　浩一　豊橋技術科学大学
柿添　正勝　日立ソフトウェアエンジニアリング
河原畑祐一　東芝メディカル九州サービス
幸田　竹司　三洋電機
小柳　憲二　日本メモレックス
嶋田　秀明　日本電気
嶋田三千男　菱電サービス
末藤　祐一　九州大日本印刷
砂川　信雄　安川工事
角　明博　三菱重工業
高岡　浩一　日立電子サービス
田中　正治　日本アイシンエイアイ・インプメント
谷川　友久　矢崎部品
谷川　昌之　日本鋼管工事
奥園　博美　松下電器産業
紙谷　伸治　椿本精工
木原敬一郎　トヨタ自動車
米田　一男　日本ビクター
猿渡　正彦　日本オイルシール工業
柴田　雄二　第一紡績
嶋津尉一郎　ブラザー工業
津川　仁　鈴木自動車工業
辻　秀則　浦島のり
中尾　清　ローレルバンクマシン
中川　義明　プレス工業
中島　啓二　旭精機工業
中満　修　日産プリンス熊本販売
西原正二郎　東京芝浦電気
原口　光治　いすゞ自動車
堀　浩二　シャープ
前田　恭　江崎グリコ
松尾　幸雄　日立メディコ
松永　之夫　佐賀エレクトロニックス
松本　光徳　ダイキン工業
矢崎　祥吉　東洋紡績
山本　昭彦　日本電装
笠　幸一郎　富士通

電気工学科

塚本　誠也　ローレルバンクマシン
戸内　正弘　安川電機製作所
中尾　輝雄　ローレルバンクマシン
中嶋　清　安川エンジニアリング
中津海無辺　日立電子サービス
蓮尾　和彦　東洋サッシ工業
東　誠一郎　ユニチカ
深浦　清久　日本電気フィールドサービス
眞崎　哲夫　花のシルシル
松崎　義和　豊橋技術科学大学
松永　幹哉　佐電工
三小田和弘　日本IBM
宮本　恭祐　安川電機製作所
宮脇　茂　諏訪精工舎
山田　浩　オリンパス光学工業
鍵水　誠治　東京電気化学工業
吉田　龍次　日本電気エンジニアリング
古賀　克己　日本電気システム建設
後藤　欽也　日新建設工業所
坂田　茂穂　高砂熱学工業
坂本　顕彦　飛島建設
坂本　俊久　奥谷組
柴田　国広　文化財建造物保存技術協会
集路　秀美　共立建設
杉本　浩明　大阪電気暖房
田川　英幸　清水建設
竹下　俊治　三田工業
武富　昌文　竹中工務店
渡口　伸晴　海上自衛隊

工業化学科

内野　悦也　チッソ
浦塚　功　日東電気工業
江頭　誠司　トパックス
片山　大介　八千代工業
清波　美佐　日本科学冶金
黒田　秀人　新日本製鉄化学工業
黒田　幸雄　電気化学工業
坂口　浩人　三菱化成工業
善田　尚秀　八千代工業
高尾　浄乃　日本電気ソフトウェア
田代　元子　日本科学冶金
田中　功　新日本製鉄化学工業
友岡　潔　丸大食品
中原　和雄　旭化成工業
西堀　浩文　三菱鉱業セメント
野口　秀行　チッソ石油化学
野口　喜和　東京電気化学工業
原田　豊志　富士電気化学
馬場　邦弘　旭化成工業
平島　豊　豊橋技術科学大学
平田　智彦　ダイキン工業
弘島　龍介　日本真空技術
松尾　利幸　アルバックサービス
松尾　良夫　豊橋技術科学大学
松岡　義輝　熊本凸版
宮津興志之　ユニチカ
森田　建司　日本ペイント
山田　俊裕　電気化学工業
山本　康浩　湧永薬品
雪田　和浩　検査エンジニアリング
渡辺　武　＊

建築学科

荒木　祐一　日本電信電話公社
岩永　勝弘　前沢建築事務所
伊藤　泰敏　松尾建設
甲斐　哲也　柄谷工務店
片平真樹夫　新井組
川本　明信　金城建設
河森　紳二　鴻池組
木山　成福　新井組
栗原　亮一　西松建設
上妻　修　福岡県庁
直理　浩二　第一建築
長浦　正成　森本組
永宗　史郎　ユニチカ
野中　裕行　日本専売公社
原口　淳二　守谷組
藤巻　忠　日立プラント建設
本田　秀徳　菱化工業
松田　裕二　戸田建設
村嶋　敏憲　菱和調温工業
和田　清房　三井ホーム

＊

同窓会よりお願い

1.同窓会費について

昭和56年の卒業生より『終身会費制』に変更されました。それまで年毎に納めていた会費を卒業時一万円納めることにより終身会員とするしくみです。そこで左記の表を参考にして、自分の残額（含終身会費）を計算し、払い込みをお願いします。

2.住所などについて

パソコンに入れることも考えて、M・E・C・A別、卒業回数、郵便番号、住所は、棟・アパートの末端まで正確に書き、ことに特異なよみ方にはフリガナをつけて下さい。

年毎の同窓会費の計算

卒業年	入会金	年会費	(終身会費)	総額
43 1	1,500円	8,000円	10,000円	19,500円
44 2	〃	7,500円	〃	19,000円
45 3	〃	7,000円	〃	18,500円
46 4	〃	6,500円	〃	18,000円
47 5	〃	6,000円	〃	17,500円
48 6 (A 1)	〃	5,500円	〃	17,000円
49 7 (A 2)	〃	5,000円	〃	16,500円
50 8 (A 3)	〃	4,500円	〃	16,000円
51 9 (A 4)	〃	4,000円	〃	15,500円
52 10 (A 5)	〃	3,500円	〃	15,000円
53 11 (A 6)	5,000円	3,000円	〃	18,000円
54 12 (A 7)	〃	2,000円	〃	17,000円
55 13 (A 8)	〃	1,000円	〃	16,000円
56 14 (A 9)	5,000円	終身会費	10,000円	15,000円
57 15 (A 10)	〃	終身会費	10,000円	15,000円

会費改定推移表

卒業年	43 ～ 52	53 ～ 55	56 以 降
入会金	1,500円	改 定 5,000円	5,000円
年会費	500円/年	改 定 1,000円/年	終身会費 10,000円
摘 要	今まで納めた金額との差が納入残額となります。		

卒業を前にして

5A　坂本俊久

五年間の高専生活を終えて、僕達は、すべての学校生活の最終ゴールのテープを間もなく切ろうとしている。

この時期に、長くもあり短かくもある自らの歩んできた道程を、ふと振り返って見るのは決して僕だけではないと思う。卒業という大きな分岐点を目前に、五年生の気持ちは皆同じだと思う。

五年前を思い出すと、高専という特殊な（適切な表現ではないかも知れない。）学校制度のもとに、最初のうちは沢山の戸惑いを覚えながら、何とか周りに遅れを取らない様にと一生懸命だった自分もいつの頃からか、見知らぬ人と話しても、『君は高専だね？』と言われる程、言わば高専の顔になってしまっていたのがとても不思議でならなかった。そんな時、僕はいつも、自分は高専学生なんだと、改めて認識させられる思いがした。

最近、外部の人々から、『近頃の高専生は、他の高校生と余り変わりばえがしないみたいだ』という意味の言葉をよく耳にする。これは本当に悲しいことではないだろうか。僕達は、受験の為に目的のわからないまま雑多な知識をつめこむ受験生でも、『高校位は出なければ』という学歴の為だけの学生でもない。もっともっと、自分達の意志を大切にする学生ではないのだろうか。

こんなことを書くと、僕はいかにも優等生みたいだが、僕の五年間も決してそんなものではなかった。学業だけに徹したとは言えないし、むしろクラブ等の活動の方に重きを置いていたと言える位だ。ただ、はっきりと言えることは、高専に進むと決めたのは誰でもない僕自身であり、過ぎてきた五年間も、僕自身の意志で過ごしてきた五年間であって、後悔は残らないと思っている。

その辺にあるのではないだろうか。高専が他の高校と違う所は。何もかもが、自分の意志で決められ、それによって行動しなければならない。一見自由だが、それなりの責任がある。

思い付くままに書いてしまってまとまりがないが、これからも高専がより高専であることを願って卒業にあたっての言葉としたい。こうしている間も、ゴールは近付いてくる。

5C　平田智彦

長いようで短く、短いようで長かった高専での学生生活。夢と希望を胸に、あの校門を潜ったのがまるで昨日の事のようです。振り返ると其処には数多くの足跡が残されています。

総てが新鮮で毎日が緊張の連続の中、何に対しても無我夢中だった一年生の春。無事進級できた安心感とまだ四年もあるという先の長さに退屈感を覚えた二年生の夏。18歳になって少しは自覚と責任を感じ始め、いつの間にか後輩の数が先輩の数と等しくなり、時の流れを感じた三年生の秋。

私服になり、もう高校生ではなくなった四年生の冬。行く先々で道に迷った東京見物や神戸ポートピアでのメルヘンチックな一日。なんといっても春の修学旅行は有意義な思い出深い旅となった。

秋の最後の高専祭では、またも化学科の展示の仕事はせず毎日ビデオ製作に熱中した。出来た作品を見る度に近くの小高い山や、海水浴場跡の砂浜でのロケーション風景が脳裏を掠める。

そして、アッという間に五年生になり、人生の進路を決める就職試験も終り、最後の体育祭ではバックボード製作に燃えた。紫色を見る度に今でも条件反射を起こす程、衝撃的な作品を作ることが出来ました。

多くの思い出を残し、我々は今社会人としてその第一歩を踏み出そうとしています。高専での五年間の教訓を活かし、自分なりにマイペースで精進していきたいと思います。御世話になった諸先生、諸先輩方に厚く御礼を申し上げると共に深く感謝し、今後の我々の活躍を温かく見守って下さることを願います。

若者は今、飛び立ちます。新たな未知なる世界に向って……。

5E　中津海無辺

振返って見て此五年間が私にどの様な成長を齎（もたら）してくれたであろうか？……。

等と月並な出だしを書いてしまってから、何とも言えぬ笑いが込み上げて来てしまった。

私が生まれて此の方、やって来た事は全て極めて刹那的であり、其場其場の判断は全て其時の己れの感情に任せて来たのである。

一度たりとも全体を俯瞰して判断した事等無い。

それを今さら、前後の関係をも迄断ち切って最近の五年間のみを俯瞰して批評を行い結論を導き出そうとしても無理である。批評の手段が私の今迄との行動と相入れ無いからである。拠って、ここでは結論を出さ無いという事で話しを進める事にする。なにせ結論を出さないのであるから、どの様な顛末になるかは、私自身判らない。ただ、「卒業に当って」というテーマから外れない様にと思うばかりである。

先にも述べた様に敢えて結論を出すという事はしないので、私なりに思いつくままに筆を進めてみたいと思う。

過去を振返るという事は建設的でないので余りよくない事だと思うが、「卒業」というと、やはりどうしても、話題が過去の方へ偏りがちであり、御多分に漏れず私も過去の話から始めてみたい。

想い出というのは不思議な事に大低が甘美なものばかりである。実際の流れとしては、つらい事や苦い体験等は長く、愉快で楽しい事は短かく感ぜられるものであるが想い出となると、此が逆で苦い体験等はかなり圧縮され、楽しい一コマ一コマが拡大されて、想い出として残っている。（たまには「イヤ違う。そんな事はない」という人もいるが、そんな人は例外であり、例外はどこ迄行っても例外であるから、代表的な意見とは成し得ない。）　此様に甘美なものばかりの連続であるから、「IF」という想像の入り込む余地もあるし、深い嘆息をつく事も出来る。

しかし、過去ばかりを見つめ、昔を賛美するのみでは駄目であると思う。それは現実からのただの逃避であり、対策を要する「今」という状況になんの応対をする事も出来ないと思うからである。

（此については、我、母校の一部の教官についてもお見うけするという事を一言申し添えておく）

次に時間について少し考えてみたい。私の場合について言えば、時間の流れというものはかなり早いものであった。その早い流れの中でもやはり、出逢いがあり、反目があり、別れがあり、亦、出逢いがあった。此流れについて言える事は、私の心を成長させてくれたという事であろう。

私と全然、関係の無い隣近所のニーチャン、ネーチャンが着飾って、お祭り騒ぎするものだとばかり思っていた。成人式を終えた今やはり私は、五年程前の私とは、「同じでないナ、イヤむしろ、同じである筈が無いナ。」という気持ちである。

この時の流れを考えるのに大切なのは、一人一人が人生をここ迄引きずって来た掲句、「時の流れ」という虚無のルツボの中で一切がうたかたの様に、男も女も、全てが無差別に「時の流れ」の中で押し流されて行くという事である。

あらゆる煩悩、あらゆる未練にさいなまれた無数の人間の間に、それとはまるで無縁の様な無頓着さをもって、徹底した激しい変化を起こすのが、「時の流れ」である。

其様な「流れ」の中にいるという事を具体的に自覚し始めた。最近になってから、自己の価値感という物に従って行動した事がほとんど無いという事に口惜しさを感ずる様になった。余りにも私は、既製の、或いは押しつけられた価

値感というものを受け入れ過ぎた様である。

此様に「卒業に当って」、愚にもつかない話を進めて来たが、最後に、私が、本校在学中に、多大なる御恩を受けた諸先生方に、厚く御礼申し上げる事で、私の話の最後をしめくくる事にしたい。

諸先生方には、迷惑のかけ通しであったにも拘らず、適切なる御指導と御厚情、本当に有難度御座居ました。諸先生方に受けた御恩を私は生涯忘れる事が出来ません。諸先生方から御指導頂いた様々な事柄を胆に銘じ、日々、研鑽致す所存です。

5M　奥園博美

早いもので、五年間の学生生活も、後二ヵ月を残すだけとなりました。この五年間を振り返ってみると、様々なことがありましたが、どれも、これもが、つい最近のことのように思われます。中でも、五年生になっての体育祭では、下級生の時のそれとは違い、後輩を指導し、まとめてゆく中に、先輩方が言っておられた機械科の、高専の、伝統というものが少しわかったような気がしました。

私にとっての高専で過した月日は、決して楽しい時ばかりではありませんでした。三年生の後半頃には、惰性に流されている自分に気付き、何とかこれを断ち切ろうと、踠き苦しんだ時もありました。また、悩み苦しんでいる友達の力になれなかった自分に情けなくなった時もありました。

しかし、こうして悩み、苦しみに対処してきた経験が今の私の力となり、また自信となっているのです。私は、有明高専で過せた青春時代を尊く思い、これを足場に失敗を恐れず、積極的な態度で、これから直面するであろう困難に立ち向って行きたいと思う。

我が師の指導から、以下のことを後輩並びに級友達に贈りたい。即ち「満ちたりたる人生の自立のために、自己に直面する日々の現実の山を、一歩一歩、また一つ一つ登りゆかねばならない。その厳しき現実と社会の山を登りゆかんとする、その生命の中にのみ、真実の充実しきった青春の価値があるからだ。そして、その深く自身の決めたこの道にのみ、無言にして、無限の言い知れぬ、広々とした広野の如き自己自身をつくり、見つめてゆくことができるのである」。後輩よ、惰性に流されることなく、しっかりした目標を持ちそれに向って一歩一歩前進せよ。何でもよい、何かに熱中して悔いのない学生生活を、友と共に送れ。

最後に、私を御指導頂いた諸先生方や、励まし、力になってくれた級友に対し、心から御礼申し上げます。

＊　＊

学年主任　須藤修一

5年生の諸君、長い研さんを積んで卒業の日を近くに迎えられたこと、本当におめでとう。三月末の君達の晴れやかな顔が目に浮ぶようだ。心より祝福申しあげる。と同時に諸君達がここまで到達できたのは、ご父兄・教職員・地域社会の方々の暖かい支援があったことを忘れてはなるまい。「生かされている自分」であることをこの際確認して欲しいと思う。

さて諸君達の大半は実社会に、また一部は進学の道を進まれる。いずれにせよ、自分が選んだ道である。自らの足で歩いて行くよりない。学生時代とちがい泣きごとや甘えは通用しない。

とくに企業は共通の目的をもった人間の集団であり、組織活性化のためあらゆる努力を払う。加えて技術革新の嵐が君達を襲うにちがいない。君達にとって毎日毎日が試験場となり修羅場となろう。本当の学問が始まるのはこれからである。専門はもとより、誠実・柔軟性・問題意識・文章表現力等等……技術者としての人間性や素養の練磨にも精進して頂きたい。10年も経てば君達にも部下がつく。その日のために四月から早速、本当の学問を始めてくれ給え。

最後に好きな言葉をおくる。

Why not the best?
（なぜベストを尽さないのか？）

学寮だより

任期を終えて

寮長　西堀浩文（5C）

思い起こせば、我々自治会は一昨年の十月に発足したわけであるので、一年三ヶ月余りが経過したことになる。最初は、本当に何にもわからなかった我々であったが、万全のスタッフ陣と、寮務主事室の先生方、寮母さん、寮事務室の方々との絶妙の連けいで寮の運営例えば、風紀上の問題、行事等を消化してきた。

必ずしも結果は「大吉」とばかりは出なかったものの、成し遂げるまでの過程を考えるならば、我々は全て満足している。いま考えてみると、我々の自治会は、何に対しても奇抜なアイディアで対処してきた。またそれがことごとくヒットしたと思っている。寮祭にしても、毎年マンネリ化しつつあった内容を一掃しようと、あれこれ考えながら盛り上げた結果、寮生のみんな、あるいは諸先生方より「今年の寮祭は良かった」と言われた時は、本当にうれしかった。初めて試みた駅伝大会も、寮母さんにだんご汁を作ってもらったりもちろん寮生の積極的な参加もあるが、この二つの行事は大成功で非常に印象が強い。また、他の行事にしても、あわよくば、単なる「消化試合」といった非積極的になりがちであった中にもかかわらず、どんなにかしてこの風潮を吹っきれないものかと、試行錯誤を繰り返していった。決して投げやりな気持ちで取り組んだことはなかった。また、風紀上のトラブルも大なり小なりあった。

やはり寮というものは、いろんな人間の集まった、集団生活の場である以上、多少の人間関係上の問題というものは生じるものである。しかし、最低限度守らなくてはならない点というものは、個人個人が自覚して、人から言われるまでもなく、守ってほしいと切望する。その最低限度にあたるものが寮則である。なかでも我々は、「勉強帯のすごし方」と、「掃除の徹底」に重点を置いた。清掃状態は、以前とは比べものにならない程良くなったと思う。ところが勉強帯の過ごし方というのは人様々ではあるが、他室に行って話をしていたり、寝ていたり。どうしてこの一時間半の時間を、他人に迷惑をかけないで自分一人で過ごすことができないのであろうか。我々は有明高専の学生である上に岱明寮の一員であるのだから、こういった最低のモラル位は守れるはずだと思う。そして、この岱明寮の一員ということを深く肝に命じておいてほしい。これをどっしりと背中にしょって生活して欲しいのである。学校を担っているのは寮生なのだから。

最後に我々五年生は、卒業を間近に控え、寮長も自治会も交替の時期がやってくる。我々自身は、先ほども述べた様に、やり遂げたという満足感でいっぱいである。第三者の目から見れば物足りない感じがしたかも知れないけど、我々にしてみれば何一つ悔いることはない。それというのも、何事にも一生懸命に取り組んできたからだと思う。三百名近くの寮生を一つにまとめていくのは難しい点が多々あると思う。さらに自治会の仕事というものは寮生の前に表面化する仕事というものは少ない。言い換えるならば、いくら手抜きをしても寮生にはわからない、と言えばそう言えるのである。しかし、それが当たり前になってしまった時、この寮というものはただ寝泊りする所になってしまう。それでは、この高専生活というものを、社会人になって振り返って見ても、何一つおもしろみがなくなってしまうだろう。これを左右するのは自治会にかかっている。だから何にしても、妥協せずにとことん納得するまで話し合い、常に向上心というものを忘れず、寮生全員のために動いてほしい。力の出し惜しみをせず、決して妥協することなく。そうすれば必ずみんながわかってくれる時が来ると思う。次期寮長・自治会に期待します。

有明高専 図書館だより ㊶

《第一回 校内読書感想文コンクールを実施して》

図書館長　丹後杏一

本年度は開校以来最初のこころみとして、読書感想文の校内コンクールを実施してみたが、学生諸君からは秀れた作品も提出され、予期以上の成果を収めることができて幸いであった。その経過ならびに結果についての全体的な報告は、後日作成配布される「文集」の中で詳細にわたって掲載されるので、それをよく読み、来年度以降の回にはより一層すばらしい作品が登場するようさらに努力を重ねて欲しいと思う。が、ここで誤解を招かぬためにも云っておくが、感想文を書くということ自体は決して目的ではなくあくまでも手段なのであり、要は読書によって知識を高め心を養うという習慣をつけてもらえばそれでよいのである。そこのところの本質をあやまたぬようこのコンクールの意味などをよく考えて欲しい。

次に、去る十二月二十四日(金)に表彰された入賞者の名をそれぞれの作品名とともに掲げる。そのうち、特選と入選の計一〇編は、前記の「文集」に掲載されるのでよく読んで欲しい。特選の沖中君の作品のみは重複をいとわずここにも掲載した。がっちりしたすばらしい文章なので熟読玩味されたい。

〔特　選〕

●ラスコーリニコフにとっての「罪と罰」
電気工学科三年　沖中　聖一

〔入　選〕

●「西部戦線異状なし」を読んで
電気工学科二年　加藤　博史
●「人間失格」を読んで
機械工学科二年　木村　敬
●「華岡清洲の妻」を読んで
建築学科四年　原　淳子
●「蜜柑」を読んで
建築学科二年　西田　正子
●「十七歳のオルゴール」を読んで
電気工学科一年　安東　聖一
●「異邦人」を読んで
工業化学科二年　西東　恵子
●「おのぞみの結末」を読んで
機械工学科三年　境　栄二
●「二〇〇一年暗黒の世界のオデッセイ」を読んで
電気工学科三年　北原　晋一
●「阿Q正伝」を読んで
工業化学科一年　平木世志実

〔佳　作〕

●「雲の墓標」を読んで
電気工学科一年　清谷　和久
●「十五歳の絶唱」を読んで
工業化学科二年　吉原　公三
●「虞十公園林」を読んで
工業化学科一年　精木ヒトミ
●「友情」を読んで
建築学科三年　津田　輝昭
●「吉里吉里人」を読んで
電気工学科二年　中村　広行
●「斜陽」を読んで
工業化学科二年　西田　尚美
●「わしらは怪しい探険隊」を読んで
電気工学科二年　田口健一郎
●「やぶれかぶれ青春記」を読んで
建築学科一年　大津　一美
●「日本語について」を読んで
電気工学科五年　松崎　義和
●「僕はマンガ家」を読んで
機械工学科三年　福岡　博之

＝特選入賞作品＝

ラスコーリニコフにとっての「罪と罰」

3E　沖中聖一

この作品は、二十三歳の大学を中退した一人の青年が、強欲な高利貸しの老婆とその義妹を殺害するという殺人推理小説風の単純な筋書きに過ぎないが、内容は相当に複雑な作品である。

とりわけ、随所に見られる心理描写はリアリティに富んでいて息を呑むものがある。また、最も興味を引くのは、有用な人間を役立たせるためには死期の迫った無益な老婆を殺しても、彼が天才である限り法律の束縛からは免れ得るという主人公の独創的な思考である。この思考は、老婆を殺す場面の行動と心理の的確なリアリティ描写と対比されつつ書かれており、それゆえに読み手の印象も鮮烈になってくる。

主人公の大学生、ラスコーリニコフの思想（いや、むしろ哲学といえるかもしれない）によると、まずあらゆる人間は「凡人」と「非凡人」という二つの部類に分かれる。この「凡人」は服従の生活を営まねばならず、法律を犯す権利を持たない人々を指す。ところが「非凡人」とは、多少とも犯罪者としての天性を、あるいはそうした傾向を持った人々であり、自己の思想のためには死骸や血を踏み越える権利を持つ、というのである。このある意味では危険な思想は、理論的殺人へと発展していった……。

殺された金貸しの老婆は肺病やみの、それでいて貪欲で意地の悪い女だったし、だれにとっても嫌悪すべき存在で、生きるに価しない者とみなされていた。

それはラスコーリニコフにとってみても例外ではない。このことは、彼自身の老婆に対する「しらみ」という言葉からも理解できる。そして彼はその有害なしらみを殺したのだ。自分だけの理屈で自分を納得させて。

彼は自分を「非凡な人間」とみなし、良心に照らして流血を認めていた。つまり、彼にとって殺人は法的には罪でも、「罪」ではなかったのである。少なくとも、犯行の時点まではそうであった。

しかし、犯行後のラスコーリニコフはただ平凡な殺人者と同じで犯罪をくらまそうとするが、良心の呵責にさいなまれて半狂乱に陥る。つまり、「罰せられた」のである。

ラスコーリニコフは老婆とリザヴェータを殺した罪によって、その後の良心の呵責という罰を受けた。だが、それだけだろうか。小説の表題「罪と罰」は、直接にそのことを意味するのだろうか。

わたしはそうとは考えない。むしろ、殺人にまで至った彼の考え方、いや、それを創造せしめた彼の絶望的な生活全体が一つの立派な「罪」であり、「罰」であるといえるのではないか。つまり、「罪と罰」はラスコーリニコフが犯罪を犯さなくても、すでに彼のものであった。

ラスコーリニコフはもと大学生であったが、今は休学し、故郷の母親と妹からのわずかな仕送りをもらいながら、赤貧で困苦と失意に満ちた生活を送っていた。彼の風貌や身なり、そして彼が寝泊まりしていた部屋の醜悪さは彼の陰鬱な精神状態を少なからず物語っていた。その上、彼は時折、熱病的な精神錯乱に陥り、忘我の境をさまよった。

ラスコーリニコフのそうした生活態度は、いわば（彼自身、意識していたかどうかはわからないが）一種の絶望状態といってもよかった。そしてその絶望状態こそ「罪と罰」にほかならないのだ。

老婆殺しの一件は絶望という「罪と罰」の必然的な一産物ではあるが、ここで注意を要するのはその事件が及ぼした影響を無視することができないということである。

それは、ラスコーリニコフの絶望状態が老婆殺しによって著しい

飛躍を迎えることからも明らかであろう。とりわけ、ラスコーリニコフの犯行を追及する明敏な予審判事ポルフィーリィとの息づまる心理的な一騎打ちなどは、彼を精神的に追いつめるのに十分であった。

しかし、この絶望に打ちひしがれた青年には更生の道が開かれていた。ラスコーリニコフはソーニャという娘と出合うが、彼女の献身的で犠牲的な愛の支えなくしては絶望という「罪と罰」を乗り越えることなどできなかったに違いない。

単純で無知な犯罪者は別として、少しでも「非凡人」型の人間には天性犯罪人たり得る素質がある。ラスコーリニコフが生み出したこの命題は恐ろしい真実の指摘であると同時に、人間とは何かという人間存在の問題を提示している。

では、ラスコーリニコフはなぜ絶望から絶望へのアプローチをするに至ったのであろうか。ラスコーリニコフを生み出した要因が、彼を取り巻く社会環境の中に、そしてすべての人の心の中に潜んでいるとしたら、それはまた我々自身の問題でもある。つまり、我々もラスコーリニコフと同じ「罪と罰」を内に秘めているのかもしれない。

ドストエフスキー著『罪と罰』
池田健太郎訳（中央公論社刊）

読書随想

「思い出の本」

一般科　瀬戸　洋

印象に残る最初の本は、小学校の時、学校から借りて読んだビクトル・ユーゴーの「ああ無情」である。ジャン・バルジャンの波瀾に富んだ物語は感動もしたが、とにかく面白かった。それこそ一喜一憂しながら、手に汗を握って読んだ。この時、本を読む楽しさを知ったような気がする。

中学ともなると性的好奇心も旺盛になる。安田徳太郎の「人間の歴史」はそういうあまり自慢にもならない動機で手にした本だが、妙に忘れがたい。学校で買ってある本だから、立派な本だったのだろうが、むずかしい所はとばしてもっぱら下半身本位で読んだ。五・六巻あったように思うが、最近はあまり見かけなくなった。

いちばん本を読んだのは、何といっても高校時代である。三年間貸本の世界にどっぷりつかっていた。手当りしだい読んだ。吉川英治、角田喜久雄、島田一男、山手樹一郎、山岡荘八、柴田錬三郎、城戸礼、平凡、漫画読本、明星、オール読物、百万人の夜、何でもござれである。下宿の近くに小さな貸本屋があったが、そこの本はあらかた読んだ。そんなふうで、学校の図書室にはほとんど足を踏み入れなかったが、たまたま借りて読んだ夏目漱石の「道草」はショックであった。人間のどろどろしたエゴイズムがなんともやりきれなくて、一週間くらいぼんやりしていた。これを機に、漱石は何冊か読んだが、「道草」ほどのショックは受けなかった。この本だけはもう一度読みかえしたいと思いつつ、いまだ果たさずにいる。

現在はテレビという化物が君臨している時代である。何かというと、ついスイッチに手が伸びて、うかうかと時を過ごしてしまう。そして結果的にはテレビに明けテレビに暮れて、テレビにふりまわされることにもなる。こんな時こそたまには本にしてみたらどうだろう。たくさんの人間が知恵を集めて秒きざみの時間におわれながら作ったものがテレビ、たった一人の人間が呻吟しながら時間をかけてしぼりだしたものが本、かたやはなやかな喧騒の世界、かたや質実な静寂の世界。両者の良否はひとまずおくとして、後者もすてたものではないと思うが、如何。

＊　＊

川崎義則先生

カナダで研究に専念

エドモントンにあるアルバータ大学で研究に専念中ですが、機械工学科に届いた手紙の一部を紹介します。

――カナダ便り――

まことに早いもので当地エドモントンに来て一ヶ月が過ぎました。その間当地のこと、大学のこと、研究室のことなどの全体像がほぼ分りかけて来た今日この頃です。

下宿先が大学のすぐ傍にある為自動車の購入もどうかということで、車なしの生活で、行動半径は極めて狭いのですが、こちらで出来た友人（カナダ人）に結構つれていってもらったりで楽しんでいます。下宿のおばさんが本当に親切で、その為もあって、外国にいる気が殆んどいたしません。

また、当地は歴史的にも日本人が住まないところで、日本人と似た顔には非常によく出会うので、到着当初は喜んでいたのですが、それらの人々は10人中10人が中国系の人や東南アジアからの人、韓国の人です。したがって、私の周囲には日本人は全くと言ってよい程いません。語学の勉強の面からはその方がいいのですが、一ヶ月たってもその割にはあまり上達しません。

気候の方は到着後殆んど連日インディアンサマーといわれる全く雲一つない青空の日が多く、気温も20度C以上に上りましたが、一たび雨が降ると急に寒くなり、5度C以下という日が2、3日続くという具合で気温の激変にびっくりしています。10月に入りやはり寒くなり昨日（10月4日）初氷が張りましたが、まだ寒さは大したことはありません。これから本当の寒さがやってくるのでしょう。

気温降下のため、青々としていた樹々が急に黄色になり、最近は街路樹もすっかり葉を落してしまいました。

日課は8時に下宿を出て、8時20分頃研究室につきます。現在は教授（ドイツに長期出張中）の一室を借用しています。その為、共同研究者のSinjo君とディスカッションする以外殆んど一人きりです。雑音は入りませんが、これも私の語学が上達しない原因の一つかも知れません。そのうち、ドクター、マスターコースの学生と一緒の部屋に移ることになっています。まだ研究が本軌道にのっていないので夕方は割合早く帰ります。週に一、二度は夕食を食堂でとりますが、殆んどは下宿で自分で作ります。これまで、料理については全く苦手で、作った経験のない私でしたが、作ってみると結構楽しいものです。下宿のおばさんと共用の台所で、おしゃべりをしながら競争で作ります。ただ作る時間に比べて食べてしまう時間の短いこと。日本に比べて肉がうまくて、安いし、果物が豊富です。

有明高専は創立20周年を迎えますが、当アルバータ大学は一九〇八年の創立で丁度75周年ということで、今秋から来春にかけて種々の行事が計画、実行中です。この時期に来れた私は本当にラッキーであったと思っています。

研究の方は、こちらの意志を完全に最優先させてくれますので、自分のペースでやっています。一ヶ月ちょっとかかって一つまとめてみましたので Sinjo君に渡しています。英文一つ書くにも他の人の数倍かかります。ただ理論のすじ道をしっかり分ってもらえれば母国語でまとめてくれる同僚がいるのは本当に有難いものです。日本での仕事での何倍かはこの点でカバーします。

しかし本格的な研究は今からです。さきにのべた利点とコンピュータが深夜運転でフリーに使える点などを生かして頑張ってみたいと考えています。（10月5日）

（その後の情報ではエドモントンにもマイナス20度C位の寒さがやってきているようです。）

学生会新役員紹介

東会長以下、旧役員の任期満了に伴って新役員が例年通り、球技大会を境に交替したので紹介する。

会長	4C	桜井　雅文
副会長	4E	佐藤　修司
〃	3A	笠原　信悟
書記	4M	西山　宏美
〃	3M	林田　歩
会計	4C	小川　素右
〃	3A	渡辺　晴美
〃	2A	寺田　尚彦
体育局長	4A	中地　明彦
文化局長	4C	江川　大海
風紀局長	4E	大塚　辰也
報道局長	4M	鶴田　徹

の諸君である。今後の活躍を期待する。

学生会長に選ばれて

4C　桜井雅文

私が学生会長として承認されまして早や三ヶ月目を迎えました。まだ〆〆未熟なため学生諸君には働いていないように見えるかもしれませんが、一生懸命頑張っています。

ここで、私が現在学校について感じている事を述べてみます。

学生について観てみますと、世間でいわれる無気力、無感動、無関心、無責任、無痛、無難の六無主義の風潮が吹きあれていると感じます。何をやるにもやる気を精一杯出しているような学生が少ない。活気がない。又、自分の行動に責任が持てない。これは何事にも関心がない事にも関連していると思います。

もう一つあります。この有明高専の学生としての自覚が薄い。薄いだけでなく、全く持っていない者もたくさんいるように感じます。私がこの学校に入学して年を重ねる毎にそれがはっきり解ってきました。自分が通っている学校に対して、自分がその学生である事の自覚がない、こんなことではいけません。今後一年間足らずですが、私が学生会長である間に少しでも活気ある学校、学生の自覚ある学校にしてゆきたいと念願しています。そのためには学生みんなが一丸となって頑張らねばなりません。

皆さん、一生懸命頑張ろう！

学生会役員研修会報告

昭和五十七年十二月十二日(日)、十三日(日)の両日、大年田ハイツで学生会新旧役員それぞれ六名、計十二名。学生主事、同補二名、合計十五名が参加し予期以上の成果を得た。第一日目はレクリエーションで肩をほぐした後、夜八時から十一時まで三時間、第二日目は朝七時半のラジオ体操で心を引き締め、九時から十二時まで有明高専の現況と、問題点と、その解決に学生会は何が出来るかについて活発な話し合いをし、例えば学習生活の向上のため、教官・学生がそれぞれの立場で工夫する必要性があること、風紀局の拡充などを確認し、今後の協力、努力を約束して終った。

冬季球技大会 熱戦を展開！

昭和五十七年度冬季球技大会（競技種目サッカー、バスケット、卓球、バレー）は、心配の雨に水をさされることもなく、十二月七日火曜午前八時四〇分から各会場に分れて熱戦を繰り広げ、午后四時半大した負傷者もなく終了した。

校内は終日若人の喚声に湧き、スポーツデーらしく学生の表情も生き生きしていた。

この大会は学生会新執行部の初仕事であったが、木山、中地新旧体育局長を中心に役員が協力して大会を滞りなく運営した。

当日の種目別優勝チームは左の通りである。

◎総合優勝　四年機械

▽サッカー　三年建築

▽バスケット　四年機械

▽卓球　二年電気

▽ハンドボール　五年化学

出席者は学生会体育局長、同補佐、新主将十六名全員、体育系総括顧問仁田原教官、および学生主事、同補一、計二十四名。

テーマは「クラブ活動の振興のために何をなすべきか」ということで、会は中地体育局長の司会で進められ、各主将からそれぞれの部の現況と努力目標とその方法などについて述べ、最後に仁田原教官の助言、学生主事の話があり、今後尚、時機を見てこの会を開きクラブ活動の発展に資することを皆で了承し、五時三十五分散会した。

会の記録を全部ここに紹介することは紙面の都合で不可能なのでその抜粋を記して会の報告にする。

今年こそ、全国大会にチームとして出場出来るよう頑張りたいと（陸上、野球、軟庭、バレー、バスケット、卓球、剣道など）かつてその栄光を手にしたクラブはほぼ一致した目標を掲げて、その意欲を見せた。そこに照準を合わせた時の具体的方法としては、本校選手は一体に小柄で基礎体力が劣る、精神的に脆弱でせり合いに弱い。その問題解決のため、練習内容の再検討、強化に工夫したいと多くの主将がのべ、「筋力・体力の向上に特に力を入れる」（バスケット）、「礼に始まり礼に終るという武道の精神を大切にし、制約のある練習時間を効果的に工夫して使う努力をする」（剣道）、「地域的な条件から〝井の中の蛙〟になり勝ちな意識〝仲良しサッカー、エンジョイテニス〟などに表われている厳しさ不足、下級生が上級生に依存し勝ちな傾向の打破、自前で紅白戦が出来るような底辺の大きい部員の確保、交流試合を多くして外の空気にふれ心身をたくましくする、などの意見が硬式庭球、サッカー、ラグビー、柔道、卓球、ハンドボール、水泳などから出た。また、登山、ワンダーフォーゲルの二部は部の特質に基づいた練習活動をして部の充実をはかりたいとの意見が述べられた。

このような意見に対して、仁田原総括顧問は、各部の適確な実態把握をもとに、どの様な改善、向上策を選ぶべきかを決めることが大切で、それが固まったならば、例えば専門コーチを招く問題については、学校（顧問会議を中心に）は、その実現のため既に下準備にはいっているし、対外試合の充実の件では、専門的な立場から援助助言は惜しまない。勿論、日常の練習プラン、チーム作りの問題等等では、独りで悩むことはせず、積極的に相談すること、その解決には最善を尽す態勢にある。

要するに、部活動の発展には、安全に充分の配慮をしながら、合理的、意欲的に皆で取組みたい、との懇切な助言があった。

最後に学生主事は、部活動の基調は学生自身の自発的な努力で、向上・発展をはかろうとする姿勢にあるし、その認識に立つことが大切であること。同時に基本に忠実で素直な、ものを吸収する態度が向上発展の起動力となる。したがって、日常生活では問題行動とは無縁の健康な心身を保つこと、目標達成のためには自らの弱さとの対決、その超克が大切で、本当のスポーツの歓びを求めて、お互になれ合いを排除し、協力して努力することを申し合せた。

外は既に夕暮れ近く、サッカーラグビー、陸上、ハンドボール、野球等がグラウンドのあちこちで寒風を突いて基礎練習に汗を流していた。

（主事室）

体育系クラブ新主将一覧

サッカー部	4A	寺本　直之
ラグビー部	4C	大川　修
弓道部	4C	小川　素右
柔道部	4A	馬場　英輝
剣道部	4C	古野　晋作
登山部	4C	廣松　豊
卓球部	4A	松尾　功二
籠球部	4M	松永　幸博
排球部	4M	黒田　眞功
軟式庭球部	4A	洞田貫淳二
硬式庭球部	4E	小島　勇司
野球部	4A	二宮　千秋
水泳部	3E	下田　辰二
陸上競技部	4C	永松　哲雄
ワン・ゲル部	3E	角　哲也
ハンドボール部	4M	角田　隆之

教育通信

機械工学科

◆張渡真一先生 新築転居 〒860 熊本市新町2丁目5　5 ℡0963－56－1571

◆田口　悟君43機 〒890鹿児島市中央町32－21唐仁原ビル1F

◆有馬慎一君43機 昭57.11.結婚 新婦泰子さん 〒211川崎市中原区井田中ノ町291－1 日本鋼管井田中アパート315号 ℡044－755－5814

◆前原照幸君44機 〒657神戸市難区高羽町5－7－13出光社宅302号 ℡078－822－2509

◆井上晶夫君44機 □オルガノ㈱福岡営業所 〒810福岡市渡辺通1－1－1電気ビルサンセルコ別館 ℡092－714－1700）〒815福岡市南区野間4－21－8 池の下ビル201号 ℡092－552－5019

◆荒木邦夫君45機 〒820－02福岡県嘉穂郡稲築町山野2373－83

◆深沢修平君45機 〒123東京都足立区扇2丁目13－1扇サンハイツ513号 ℡03－896－1386

◆根来育生君46機 〒350－02坂戸市片柳417－15

◆渋谷安洋君46機 〒488尾張旭市晴丘町東111 日立旭社宅J－110 ℡0561 5－4－0441

◆新村次雄君47機 〒273船橋市行田町15－2行田団地1－14－901

◆田嶋義治君47機 〒675－23加西市北条町古坂2丁目26－2 ℡07904－2－5078

◆岳　秀文君47機 ℡03－395－3158

◆前川博治君48機 〒836大牟田市平原町300平原アパート326号

◆日野雅夫君48機 □日本電気㈱第一LSI工業事業部 自動化推進部（〒229相模原市下九沢1120）

◆〒213川崎市高津区子母口332の1

◆鶴田勝彦君49機 〒575四条畷市清滝中町23－301 ℡0720－79－4389

◆渡辺章一君49機 〒362上尾市瓦葺27163の1の103

◆猿渡英敏君49機 〒329－12栃木県高根沢町宝積寺1227－8

◆深耕昭彦君49機 〒中華人民共和国北京市海淀路友宜賓館8132号（昭59年9月頃まで出張）

◆木下裕治君49機 〒362上尾市菅谷東通り1052－6

◆成瀬圭司君50機 〒730広島市南区京橋町2－28 コーポ駅前ビル402

◆原田真澄君51機 □通産省工業品検査所札幌出張所（〒063札幌市西区発寒四条1－37－2 ℡011－664－3621）〒064札幌市中央区南十条西22丁目通産局アパートA201 ℡011－563－9376

◆堀田祐一君51機 〒802北九州小倉南区西水町11－17有吉アパート201号 ℡093－941－6803

◆朱雀孝道君51機 昭57.11結婚 新婦は美子さん（旧姓有田）□東京芝浦電気㈱名古屋工場（〒451名古屋市西区覆原町4－21）

◆〒451名古屋市西区上名古屋3－10－11貫久屋ビル501号 ℡052－524－6353

◆入江誠二君51機 〒274船橋市薬円台4丁目24二宮住宅4－102 ℡0474－62－2040

◆西川　康君51機 □肥後計量器有限会社（〒860熊本市春日1－7－5 ℡0963－56－2600）

◆〒860熊本市魚屋町3丁目8 吉本政治方

◆鷹羽良一君52機 〒569大阪府高槻市岡本118－1 旭興産㈱高槻寮

◆花嶋啓二君53機 昭57.12結婚 新婦は順子さん（旧姓成瀬）

◆〒470－12豊田市永覚新町2－56永覚アパートA602号

◆田中靖則君53機 〒213川崎市宮前区向ケ丘934の6の305

◆古田幸男君53機 〒175東京都板橋区高島平3の12の10 消防寮402号室

◆平　逸郎君53機 昭57.11.結婚 新婦は真智子さん（旧姓緒方）

◆和田光一君53機 〒590－05大阪府泉南市信達大苗代62－64－401

◆白木満雄君53機 昭58.1.18自転車による世界一周旅行に出発 昭62.9.帰国予定、成功を祈ります

◆松井利治君54機 〒340草加市稲荷町927昭林寮

◆鹿毛信吾君55機 〒940長岡市下山4の39の1第2飯茂ハウス8

◆今岡義晴君55機 〒440豊橋市浜道町字管石13の3

◆野間口勝康君55機 〒811－23福岡県粕屋郡宇美町大字戸原67ホワイトハイム102

◆福山輝彦君 葦（55機）〒640和歌山市松江東1丁目7－8山崎雅男内

◆藤岡正利君56機 〒570大阪府守口市大枝南町3の7大枝ハウス9号

◆新年同窓会

○13期生 58.1.2 ガーデンホテルにて（出席者）淡路、今岡、上原、岡本、鹿毛、椛島寿、椛島俊、上妻、塩塚、茂見、杉本、武末、田中、辻村、友田、西田、西山、畑野、平山、松藤、宮崎、渡瀬（以上22名）木本、猿渡両先生出席

○15期生 58.1.2「たらふく」にて。卒業後はじめての会合で、話が弾んでいた。出席者は26名

電気工学科

◎照明学会にお願いして、講演（演題"エネルギーの現状と将来"）が12月13日、視聴覚教室で行われました。講師は九州大学エネルギー変換工学の赤崎正則教授で、エネルギーと照明とのかかわりあいについての話が、電気工学科4年および5年を対象にありました。

◎同窓会開催

昭和58年1月21日、大牟田市内で昭和56年卒の同窓会が行われました。（幹事　浜口、森口の両君）須藤、浜田両先生はじめ、岩崎、島津、園田の三君、57年卒の幸田永野間の両君等が参加され、総勢27名を数え盛況に行われました。

◎次の方々が結婚されました。おめでとうございます。

◆北浦政人君52電　昭和57年10月2日挙式。新婦は旧姓荒川恵子さん 新居　〒251神奈川県藤沢市藤ケ岡1の1藤沢団地5の306 ℡0466－23－7829

◆村上仁司君49電　昭和57年10月10日挙式。新婦は恵子さん。新居 〒864熊本県荒尾市大島65の6 ℡09686－4－1804

◆阪本博明君52電　昭和57年10月11日挙式。新婦は旧姓大森せつ子さん。新居　〒703岡山市関463の15 ℡0862－79－7809

◎以下の方に転勤がありました。

◆小松儀臣君49電　ゼロックス中九州営業所から沖縄営業所に転勤（57.11付）住所 〒900那覇市天久1060の1高田上之屋マンション106号 ℡0988－66－6452

◎勤務社名変更

◆丸山誠義君57電　57年11月より今までの社名DEC日本支社から日本DECに社名変更（会社所在地および住所は不変）。

◎以下の方々に住所の変更がありました。

◆上村修君43電　〒816福岡市南区横手4－7－9－305

◆下田一郎君45電　新住所 〒319－11 茨城県那珂郡東海村白方1712の5 ℡02928－2－8344（新築移転）

◆川原義昭君49電　〒187小平市小川東町2800－1BSアパートC4208

◆立道孝臣49電　新住所〒274千葉県船橋市三山三丁目29の17 ℡0474－78－5388

◆北島和浩君57電　〒520－23滋賀県野洲郡野洲町小森原1155 葵マンション2の5号

◎以下の方が学校に来訪されました。

小林和裕君51電、古賀稔君54電、前田正治君55電、水原誠二君56電、丸山誠義君57電、宮地寿人57電、宮園健一君50電

◎卒業生の住所不明者が次の様になっています。住所を知っておられる方があれば御面倒ですが電気工学科までお知らせ下さる様お願いします。以下敬称略。

◆43年卒　田崎徹、松藤陽三、弓削孝一、荒金恵一

◆44年卒　石田帝力、加藤修治、高倉寛昭、永松新、原口俊英、日巻良文、藤可房雄、前畑聡一、松元千速

◆45年卒　有馬伸一郎、伊津野進、松崎英紀、村上文敏、森本恭広

◆46年卒　石崎実、上田公明、上村秀記、大津正光、辻田敏広、中村秀、萩原良三

◆47年卒　江川正広、岡村博行、新東和弘、東浦久男、野田富広、米増弘

◆48年卒　久保輝昭、末崎栄一、竹下祐二、筑紫和利、原保夫

◆49年卒　大田将雄、北島芳寛、鈴木公司、成清秀敏、浜崎誠、益田昌明、山下悦郎、吉開敏弘

◆51年卒　西野敏夫、黒田光春、宮崎正幸

◆52年卒　小山邦男、北里弘行、米田紀雄、塚本克典、橋口和弘、吉浦重幸

◆53年卒　入口浩、小林修二、丸山博志

◆55年卒　濱本太志郎

◆57年卒　平田裕二郎

工業化学科

◎現在、同窓会名簿を作成中ですが、次の方々の消息がわかりません。当人、又は消息を御存知の方がいらっしゃいましたら、工業化学科宛お知らせ下さい。

清田憲史43、永浜康隆44、姪野賢一44、古賀幹雄45、坂井利広45、伊藤明47、宇都宮俊徳49、中嶋篤己49、猿渡良雄50の方々です。（ ）内は、卒業年次です。

◎工業化学科は、現在、城戸英彦先生が、主任を担当されています。又事務の中村節子さんは、昭和57年5月付で建築学科に移られ、かわって一般科から奥苑登志子さんがこられて事務をとっておられます。

◎小川芳弘先生は、昭和56年9月24日付で工学博士の学位を受けられました。

◎渡辺徹先生は昭和57年7月付で、講師に昇格されました。

◎以下の方々に住所の変更がありました。

◆松本憲二君45化　〒190－12武蔵村山市三ツ木989－14

◆浜石義公君51化　〒868人吉市上青井町140

建築学科

◆S51年4月より教えて戴た技官の村久木志郎氏が昨年11月11日付で九州大学施設課に転勤されました。6年間どうもありがとうございました。〒816福岡市南区井尻1－35－10 コーポ彩雲303号

◆昨年12月12日福岡市内で九州管内在住者の同窓会が卒業生50名と玉野・吉岡・新谷・上原先生の出席のもとに開かれました。会は非常に盛りあがり、今後とも継続していくべきと、各期幹事と会長として塩塚啓志君（49建）が選ばれました。

◎1月2日に10期生の同窓会が5：30より大牟田市内「小次郎」にて、同じく6：30より9期生の同窓会が「ませ」にて開かれました。9期生20名、10期生25名と新谷・三宅先生が出席され、盛会裡に終わりました。

◆野田繁子君49建　〒810福岡市中央区長浜1－1－17 ℡092－781－1625

◆福島義則君（旧姓柴戸）49建　〒920－01金沢市法光寺町ホ41

◆河原正明君51建　〒750下関市竹崎町2丁目8－11 下関ステーションホテル寮

◆松鶴秀也君51建　〒千葉県市川市南八幡3－19－10旭化成千葉寮

◆古閑一誠君52建　10月2日結婚 新婦子子さん。おめでとうございます。〒167東京都杉並区上荻4－4－8電々社宅208 ℡03－397－2662

◆鬼武雅二君53建　□アイサワ工業退社　〒822直方市上境1714 ℡4－5356

◆井上研二君54建　11月17日結婚 新婦説子さん　おめでとうございます

◆中島洋子君54建　〒816福岡市南区井尻5－13－9コーポ高南202号

◆出田時久君55建　□旭化成ホーム㈱静岡営業所設計課（〒420静岡市紺屋町11－4太陽生命ビル5階 ℡0542－55－7311）〒332静岡市西脇682スカイプラザおか20B

◆江藤均君55建　〒185東京都国分寺市本町1－2－39

◆浜村節子君55建　〒662西宮市高座町5－5朝野マンション206号 ℡0798－74－7734

◆福島一義君55建　〒816春日市春日原東町1－6－1柳吊ビル303号

◆松本博君56建　〒北九州市八幡西区西王子町12－5菱化工業㈱独身寮

◆今村利弘君57建　□三井ホーム㈱横浜支店営業課（〒220横浜市西区北幸1－4－1横浜天理ビル21階 ℡045－319－5131）

◆小形伸治君57建　〒札幌市豊平区平岸1条10丁目康隆工業寮

◆岡野公嘉君57建　〒453名古屋市中村区千成通の43アイサワ工業内

◆下田英夫君57建　□菱和調温工業㈱大阪支店サービス部（〒530大阪市北区天満2－7－3 ℡06－352－4881）

◆宝部勝彦君57建　〒名古屋市千種区富士見台1－22新井組富士見寮202号室

◆南部圭輔57建　□㈱瑞池組広島支店建築工務部設計課（〒730広島市中区八丁堀2－31広島瑞池ビル ℡082－228－1162）

◆日吉良昭君57建　清水建設㈱設計部（〒104東京都中央区京橋2－16－1 ℡03－535－4111）

◆藤崎剛君57建　〒神奈川県秦野市堀山下1頭心寮A202

◆山田幸生君57建　□コクヨ㈱施設用品事業部大阪制作設計部制作設計第二課（〒537大阪市東成区大今里南6－1－1 ℡06－976－1221）

◆山本茂範君57建　〒福井県大飯郡大飯町本郷大林組宿舎

◆以下の方々から教室に年賀状をいただきました。（敬称略）鶴田誠（48建）、野田繁子、益田恵吾（49建）、原善章（50建）、古閑一誠、桑田寿稔（52建）、鬼武雅二（53建）、中島洋子（54建）、江藤均（55建）、松本博（56建）、小形伸治、藤崎剛、山本茂範（57建）以上

有明ラグビー部
三度目の正直ならず！

昭和五十七年度の九州地区高専ラグビー・フットボール大会は、去る十一月十七日から四日間にわたって、熊本市の県民総合運動公園で開催された。前日の監督者会議での抽選の結果、対戦相手は、奇しくも佐世保高専チームと決まり、前々回の都城、前回の北九州そして今回の熊本大会と三年連続して二回戦で佐世保高専と対戦することになった。過去二回とも残念ながら佐世保に苦杯を強いられている我が有明ラグビー部は、「今年こそは」と意気込んだが、善戦及ばず四十一対四で敗れた。三度目の正直成らずして二度あることは三度ある結果に終った。

試合の前半はほぼ互角に展開されたが、相手側ゴールライン近くまで攻め込むものの、トライまでにもう一歩のところで得点出来ないケースが三回程見られ、又、後半戦では我が方にパスミス、キックミス等が続出して立て続けにトライを許し、その結果緊張感の糸がぷつりと切れてやや一方的な試合運びとなってしまった。それでも、我が方には随所に目を見張るプレーも見られたし、専門のラグビーコーチの不在という状況の中で選手諸君はよく健闘した。

この四・五年、有明ラグビー部は勝利から遠退いているが、その原因なりを考えてみると、先ず第一には、専門のラグビーコーチの不在が考えられる。今大会に出場した八チームの内六チームまでがコーチの下に日々練習を積み重ねて大会に臨んでいる。また、第二には、練習試合の回数の絶対的少なさが挙げられる。現在のところ大牟田市には練習相手となる学校が皆無で、練習試合には北は久留米、南は熊本、八代まで遠征して練習試合を行っているが、その回数が少ないことは否めない。三つ目の理由として部員数が絶対的に少ないことが挙げられる。久留米八代高専を例にとると、その部員数は約五十人である。有明の場合は現在三十二名で、一年生を除くとレギュラー選手を確保するのがやっとの現状。その他考えられる事は色々あるが、有明ラグビー部再建のために少なくとも以上の三点を改善することが必要だろう。それと同時に忘れてはならない事に、選手一人一人の気魄、ラグビーに対する熱意の高揚も今一つ望まれるところである。

最後に今大会に熊本まで応援にかけつけて下さった仁田原、塚本両先生、先輩OBの諸氏に、この紙面を借りて謝意を表します。

ハンドボール
九州地区大会報告

昨年の七月四日、八代高専において全国高専ハンドボール大会の九州地区予選が開催された。参加五校（北九州、八代、都城、有明、鹿児島）によるトーナメント形式で、我が校は第一試合で鹿児島高専と対戦した。結果は、17対21で敗退したが、本校にとっては正に「惜しい」試合であった。

毎年度優勝の強敵故か、前半戦は各人緊張し、ちぐはぐな攻守で5対11と大量リードされ、もはやこれまでと思われた。

しかし、後半はよく立ち直り、逆に12対10と劣勢を挽回し、あわや逆転かという場面も数度となくあった。おしむらくは前半戦の失点が大きすぎた。

大会をふり返って、各校とも近年になく実力が伯仲してきており部員の増々の奮気を期待したい。

終わりに、応援に早朝よりかけつけて下さった学生主事、体育教科の諸先生方に部を代表して御礼申し上げる次第である。

昭和58年度　新入生オリエンテーション予告

五十八年度新入生オリエンテーションは四月二十四日(日)から二十六日(火)まで二泊三日の予定で天草青年の家で行われる。

工場見学

●10月21日～22日　2A
野外研修

●10月28日～29日　3E
新日本製鉄㈱大分製鉄所
九州石油㈱大分製油所

●11月5日～6日　1A
島原地区都市計画研修

●11月5日　4A
熊本県立美術館
熊本市立博物館
西合志町立南小学校

●11月9日～10日　2M
三菱電機㈱熊本工場
本田技研工業㈱熊本工場
九州電力㈱八丁原地熱発電所

●11月11日～12日　2C
㈱香蘭社
三菱電機㈱長崎製作所
三菱重工業㈱長崎研究所
同　右　長崎造船所

●11月18日　4E
三菱電機㈱熊本工場
九州電力㈱黒川第一発電所

●12月2日～3日　4M
国鉄新幹線博多車輌部
日産自動車㈱九州工場
三菱鉱業セメント㈱苅田工場
同　右　東谷鉱山

●12月9日　4C
三井金属鉱業㈱三池事業所
電気化学工業㈱大牟田工場

昭和58年度　研修旅行日程

機械工学科

引率教官　山下他1名

5・18　大牟田8・16発列車→川崎重工業㈱明石工場見学→17・30神戸泊

5・19　神戸8・30発バス→三菱電機㈱神戸製作所見学→三洋電機㈱冷蔵庫製造事業部（守口市）見学→17・30奈良泊

5・20　奈良8・00発バス→㈱森精機製作所伊賀工場見学→京都市内観光→17・30京都泊

5・21　京都10・53発新幹線→博多→16・00大牟田着・解散

電気工学科

引率教官　木庭他1名

5・18　大牟田8・16発列車→12・32広島着→東洋工業㈱本社見学→18・29京都着→京都泊

5・19　宿舎8・30発バス→三洋電気㈱見学→三菱電機㈱京都製作所見学→京都泊

5・20　京都9・03発→9・38野洲着→日本IBM㈱野洲工場見学→午後自由研修→京都泊

5・21　京都10・53発新幹線→博多→16・00大牟田着・解散

工業化学科

5・18　大牟田7・10発列車→日本ペイント㈱大阪工場見学→16・30大阪泊

5・19　鐘渕化学工業㈱大阪工場見学→旭硝子㈱関西工場見学→16・30京都泊

5・20　ダイキン工業㈱淀川製作所見学→16・30京都泊

5・21　京都10・53発新幹線→博多→16・00大牟田着・解散

建築学科

5・18　大牟田8・16発列車→13・40新神戸着→ポートアイランド芦屋浜高層住宅見学→西宮泊

5・19　西宮8・00発バス→法隆寺等（奈良）見学→京都国際会館見学→京都泊

5・20　京都グループ研修→京都泊

5・21　宿舎8・00発→千里ニュータウン・民族博物館等見学→大阪空港17・00発→福岡空港着・解散

記事訂正

「高専だより」第五十号四ページで、45m電波望遠鏡は7200tとあるが、七百二十トンの誤り、尚この文の冒頭に、「引率教官、木本、川崎教官、学生三十三名」の脱落があった。

この外、毎号校正不行届のため執筆者に御迷惑をかけていることを併せてお詫びする。（学生主事）